

保育内容「環境」における運動あそびの実践に関する研究

A Study on Practice of Exercise Play in the Childcare Contents Environment

伊 藤 哲 章* 星 野 朋 子* 柴 田 卓*

Tetsuaki Ito

Tomoko Hoshino

Suguru Sibata

Through this research practice, four effective problems were clarified. First of all, most students when surveyed about Finland (PORPPUISTON preschool) exercise games answered positively that this practice of play exercise is useful for their practice teacher training. Secondly, regarding the difference in child development recently, a statistically significant number of students responded that the difference in growth and development is larger than when compared to those who do not practice play exercise. Third, there are statistically significant numbers of students who responded that practicing participants who do play exercise can better comply with rules as compared with practitioners who do not participate in play exercise. Fourth, play exercise and being safe while practicing all type of play exercise is of special mention.

1 はじめに

新しい幼稚園教育要領¹⁾が平成29年3月に告示され、平成30年4月より施行された。今回の改定は平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、5つの基本方針に基づき行われた²⁾。その基本方針の一つに、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進がある。カリキュラム・マネジメントとは、各学校の教育課程に基づき全教職員の協力体制の下、組織的・計画的に教育活動の質の向上を図ることである。したがって、幼稚園教諭が指導計画を作成し指導を行う際には、幼児の生活全体を視野に入れ、幼児の興味や関心の方向や必要な経験などを捉え、適切な環境を構成することが必要不可欠である。また、幼稚園教諭は幼児が具体的な活動を通して様々な体験をし、望ましい発達を遂げていくように促さなければならない。これについて、幼稚園教育要領解説では、環境を構成する視点として、①発達の時期に即した環境、②興味や欲求に応じた環境、③生活の流れに応じた環境、以上の3つをあげている³⁾。

一方、海外に眼を転じると、2016年のフィンランドの教育改革では子どもの能力の評価基準が、①思考力、②コミュニケーションや表現力のような文化的能力、③自活能力、④マルチタラシー能力、⑤ICT能力、⑥起業や仕事のための能力、⑦社会への参加や権利と責任の所持、以上の7つの領域に分けられている⁴⁾。とりわけ、子どもの心身の健康的な発達のために

※ 幼児教育学科

日々の身体活動を重視している⁵⁾。例えば、フィンランドの保育園では日本の2倍にあたる2時間の運動を毎日取り入れることを推奨している。柴田が訪問したノキア市の保育園PUROPUISTON(以下P保育園とする)では、運動の要素を園生活に取り入れており、園庭やホールでの運動以外でも生活や環境を工夫することで毎日の2時間の運動を可能としている。ここでは、子どもが日常的に廊下や教室の壁面などで自由に運動できるように環境を工夫している。こうした日々の運動を継続することは、幼児の心身の健康的な発達のために世界保健機構(WHO)でも推奨している⁶⁾。

我が国でも幼稚園教育要領(平成29年告示)において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の最初の項目に「健康な心と体」があげられている。そして、「健康な心と体」は領域「健康」のみで育まれるのではなく、すべての領域の内容に基づく活動全体として育まれるとされている⁷⁾。しかしながら、フィンランドのP保育園で実践されている室内でのあそびの工夫が、我が国の幼稚園・保育園で実践されることは少ない。そこで、本研究ではフィンランドのP保育園の事例を参考にして、日常生活に取り入れることが可能な運動あそびを幼稚園の保育室の壁面や廊下で実践し、その有効性や課題等を探ることにする。本研究実践によって、学生が幼児の身体の発達に必要な具体的な環境構成を考え、幼児の活動に沿って身体の発達を理解できるようになることを期待する。

2 研究方法

下記の研究方法で、2017年、2018年の2年間にわたり本実践を行った。

(1) 運動あそびの計画作成

最初に、「保育表現技術体育Ⅰ」の担当者(柴田)と「保育内容演習生活と環境Ⅱ」の担当者(伊藤)で本実践の計画を作成した。本実践の参加学生は、「保育内容演習生活と環境Ⅱ」を履修したK女子大学短期大学部幼児教育学科の2年生で、参加人数は2017年が130名、2018年が123名であった。ただし、保育士資格必修である施設実習の期間と幼稚園での運動あそびが重なっているために、本実践に参加できない学生が2017年、2018年ともに3分の1程度に上った。

(2) 運動あそびの実践

まず、柴田がフィンランドのノキア市のP保育園を訪問した際の様子を紹介し、写真・動画をもとに運動あそびの実践例を中心に学生に説明した。P保育園の運動あそびの特徴は、週に1度だけ運動場で運動を行う以外は、外あそびや普段のあそびの中で毎日2時間程度の運動の要素を取り入れている点である。P保育園の子ども達は、保育室の廊下や壁面等に設置されて

いる運動の器具を利用し、日常生活の中であそびながら運動を行っている。なお、P保育園の運動あそびの具体例は、「運動あそびにおける保育実践力に関する研究—フィンランドの事例と体育系授業の実践—」⁸⁾を参照されたい。

次に、伊藤が本実践の計画を学生に説明した。まず、4人から6人程度の班を作成し、班毎に運動あそびのテーマを決定し、具体的な計画書を作成した。続いて、その計画書に基づき班毎に制作物を作成し、最後に私立K幼稚園の園児を対象に、施設の壁面や廊下等を利用した運動あそびを実践した。

(3) アンケート調査の実施

実践終了後に、参加した学生に運動あそびの実践で気づいた点を自由記述で回答させた。また、学生はグーグルフォームを利用して、選択式(4択)のアンケートにも2018年のみ回答した。加えて、私立K幼稚園の幼稚園教諭を対象にアンケート調査(自由記述)を2017年のみ実施した。

3 結 果

(1) 運動あそびの実践

今年度は、制作物を作成する時間が足りなかったという前年の反省を活かし、2コマ分(90分×2)の授業を制作物の作成時間にあてた(表1参照)。なお、2017年の実施計画及び実施テーマは「保育者養成校における実習を中心とした科目間連携に関する研究」⁹⁾を参照されたい。

表1 2018年の「運動あそび」の実施計画

クラス別の実施日(各90分)				場所	内 容
2Aクラス	2Bクラス	2Cクラス	2Dクラス		
6月20日	6月20日	6月20日	6月20日	教室	北欧の運動あそびを柴田が紹介し、本取組の趣旨を伊藤が説明した。その後、班を決定し計画書を作成した。
6月29日 7月6日	6月25日 7月2日	6月29日 7月6日	6月25日 7月2日	教室	計画書に基づき、班毎に運動あそびのための制作物を作成した。
7月13日	7月9日	7月13日	7月9日	K幼稚園	K幼稚園の保育室の壁面や廊下に制作物を設置し、実際に園児が運動あそびを体験した。
7月20日	7月23日	7月20日	7月23日	教室	振り返りシートを記入し、アンケート(選択式)に回答した。

各クラスともに自由に運動あそびのテーマを決定して、計画・準備を行った。2018年のクラス別の各班のテーマは表2のとおりである。

表2 2018年の各班の実施テーマ

	2Aクラス	2Bクラス	2Cクラス	2Dクラス
1班	クモの巣をくぐろう	ボウリング	的当てと足あと	投げてみよう！ 輪投げゲーム
2班	アドベンチャー ストリート	セキュリティ レーザーシステム	楽しい！ 色、いろ、イーロ！	おり姫に 会いに行こう！
3班	海の生き物	目指せ！ワールド カップサッカー！	ジャンプでタッチ できるかな？	生き物の名前を当てな がらゴールしよう！
4班	ボウリング	全身を使って タッチ！	見せつけようZE！ オレたちの腕力！	けんけんぱと ボールあそび
5班		ホップ・ステップ・ ジャンピング！	水中探検！	楽しい運動あそび！
6班			ボールを投げよう	

(2) 調査結果

①学生対象のアンケート(選択式)結果

まず、質問1のフィンランドのP保育園の運動あそびは、99%の学生が「興味をもった」と回答した(図1参照)。質問2の「今回の実践が実習に役立つかどうか」は、そう思うと回答した学生が97%に上った(図2参照)。

続いての質問3では、私立K幼稚園での運動あそびの実践の参加の有無を調査した。前述の通り、計画・準備までしか参加できない学生が3分の1程度いたためである。次に、質問4で

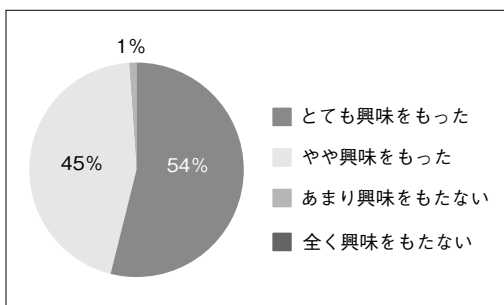


図1 P保育園の運動あそびへの興味について

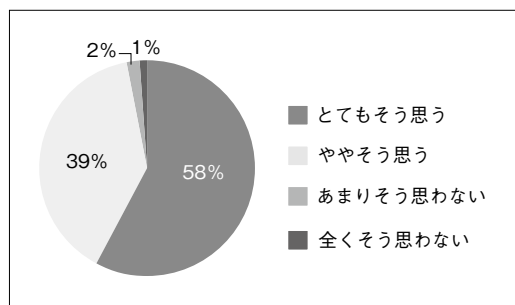


図2 今回の実践が実習に役立つか

は子どもの運動能力、質問5では子どもの発育発達の違い、質問6では子どものあそびの工夫、質問7では子どもがあそびのルールを遵守しているかについて4件法でそれぞれ学生に質問を行った。その後、運動あそびの実践に参加した学生と参加出来なかった学生の回答に違いがあるかどうか χ^2 二乗検定を行った。結果は、表3～表6のとおりである。なお、残差分析の結果、有意に多い場合は+、有意に少ない場合は*を示した($.05 < p$)。最近の子どもの運動能力について(質問4)は低いと回答する学生が多く、子ども達があそびを自分たちで工夫している(質問6)と回答した学生が多かった。これらは、実践参加者と不参加者で回答に有意差はなかった。また、子どもの発育発達の違いについて(質問5)は大きいと回答し、子どもがルールを守って運動あそびができるかについて(質問7)はそう思うと回答した学生が多かった。ここでは、実践参加者と不参加者で回答に有意差が見られた。

表3 最近の子どもの運動能力について

質問4	高い	低い	合計
実践参加者	18	44	62
実践不参加者	6	22	28

カイ二乗検定 $\chi^2(1)=0.570$ 有意差なし

表4 最近の子どもの発育発達の違いについて

質問5	大きい	小さい	合計
実践参加者	54 ⁺	8 [*]	62
実践不参加者	19 [*]	9 ⁺	28

カイ二乗検定 $\chi^2(1)=3.489$ $.05 < p < .10$ 有意差あり

表5 最近の子どもが自分たちであそびを工夫しているかについて

質問6	思う	思わない	合計
実践参加者	42	20	62
実践不参加者	22	6	28

カイ二乗検定 $\chi^2(1)=1.101$ 有意差なし

表6 最近の子どもがルールを守って運動あそびができるかについて

質問7	思う	思わない	合計
実践参加者	49 ⁺	13 [*]	62
実践不参加者	17 [*]	11 ⁺	28

カイ二乗検定 $\chi^2(1)=3.310$ $.05 < p < .10$ 有意差あり

②学生対象のアンケート(自由記述式)結果

次に、学生は本実践に参加した後に、実践を振り返って気づいた点を自由に記述した。結果は、図3のとおりであった。2017年、2018年ともに、「子どもが楽しんできてうれしい」「環境構成・教材研究(準備・計画)について」「発育発達や運動能力の気づき」の3つをあげる学生が多かった。

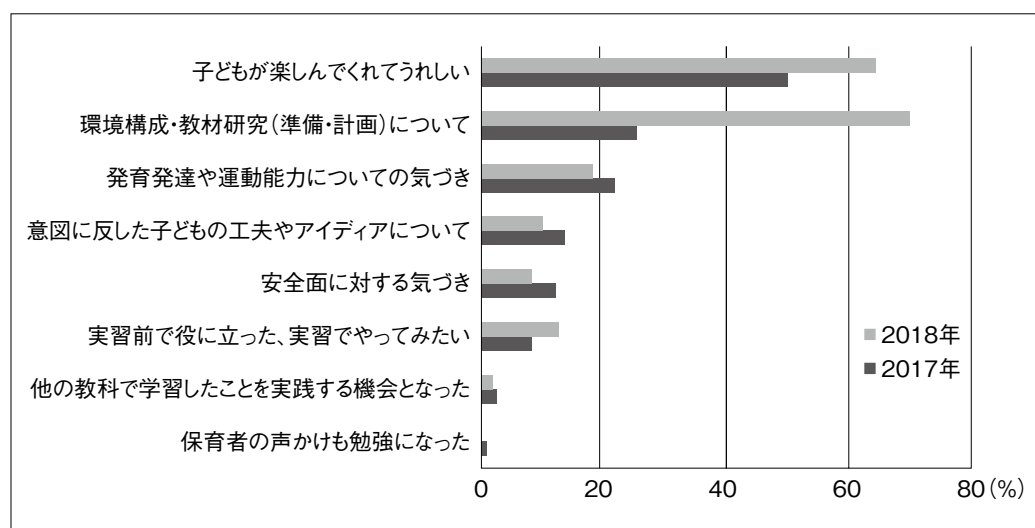


図3 学生の振り返りシートの自由記述の結果

③幼稚園教諭対象のアンケート(自由記述式)結果

続いて、本実践に参加した私立K幼稚園の教諭を対象に、実践後に「良かった点」「改善点」「その他気づいた点」についてアンケート(自由記述)を依頼し、5名の教諭から回答が得られた。その記述内容は「方法」「環境」「効果」「その他」に分類できた(表7参照)。

表7 幼稚園教諭の自由記述の内容

方法	動物などの親しみのあるもので良かった。
	保育室の壁面を利用しているところが良かった。
	近くにかたまって行われていたので、子ども達の動線、安全面を考える必要があった。
	子ども達を目線に合わせた位置や大きさ、高さにしていた点も良かった。
	幼稚園の中で友達を誘いながら参加できて良かった。
	学生さんも一緒に子ども達と取り組むことで、子ども達もより楽しく興味をもってくれた。
	あそび方の説明をわかりやすく説明する。
	運動の中でもどんな動きや目的のために行われているかを明確にする。
環境	もう少ししっかりとした作りのものが良かった。
	たくさんの海の生き物がいて視覚的にも楽しめた。
	立体的な足跡が床との接着が完全でなく、転倒の危険を感じた。
	デザインなどが良くて、子ども達が興味をもって取り組んでいた。
	年齢に合わせた運動や配慮などが必要。
	運動あそびから子ども達がどんなことを学ぶかを予測しながら製作する。
	ヒトの足跡だけでなく、動物や恐竜の足跡があって良かった。
	ボール投げで投げる距離、高さ、ボールの大きさなどの段階があると良かった。
効果	励ましたり表現したりすることで、子ども達のやる気や挑戦する気持ちが出てくる。
	子どもと一緒に達成感や充実感を直に感じることで、保育者の大切さを感じることができる。
	運動あそびを通した保育者との関わりで子どもの非認知能力が培われる。
	的当ては、ボールをうまくコントロールする経験が保育の中では少ないので良いあそびであった。
	あそび方を子ども達自身で工夫していた。
	跳ぶことやボールを的にあてるなど普段の生活ではあまり使わない体の部分を使うことができた。
	片足飛びの動きが苦手な子どもも楽しみながら行う姿が見られた。
	様々な動物の足跡があり、生き物の足跡を知る機会となった。
	どんな動物の足跡かを考えたり、話したりしながら楽しめた。
その他	海の生き物などの可愛いものを踏んでしまうことにためらう子どもはいなかった。
	実習で出会った子ども達と再び触れ合うことができ、子ども達の成長を感じる事ができていた。
	あそびながら楽しく運動できることは子ども達にとって嬉しいことだと思う。

次に、幼稚園教諭の自由記述についてテキストマイニング分析を実施した。本調査のテキストマイニングで利用した「KH Coder」はフリーソフトウェアである¹⁰⁾。図4は、KH Coderの共起ネットワークのコマンドを用い、幼稚園教諭の自由記述の中で出現パターンの似通った語(すなわち共起の程度が強い語)を線で結んだネットワーク図である。共起ネットワークは、テキストマイニングにおいて最も強力な分析手法であり、頻出語間の共起性を分析することができる¹¹⁾。なお、幼稚園教諭から得られた自由記述のデータ数は27で、152件の文章が確認され、分析に使用された語は375語であった。また、分析にあたって出現数による語の取捨選択を最小出現数2に設定し、描画する共起関係の絞り込みを描画数60に設定した。共起ネットワークは、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きな円で描画されている。

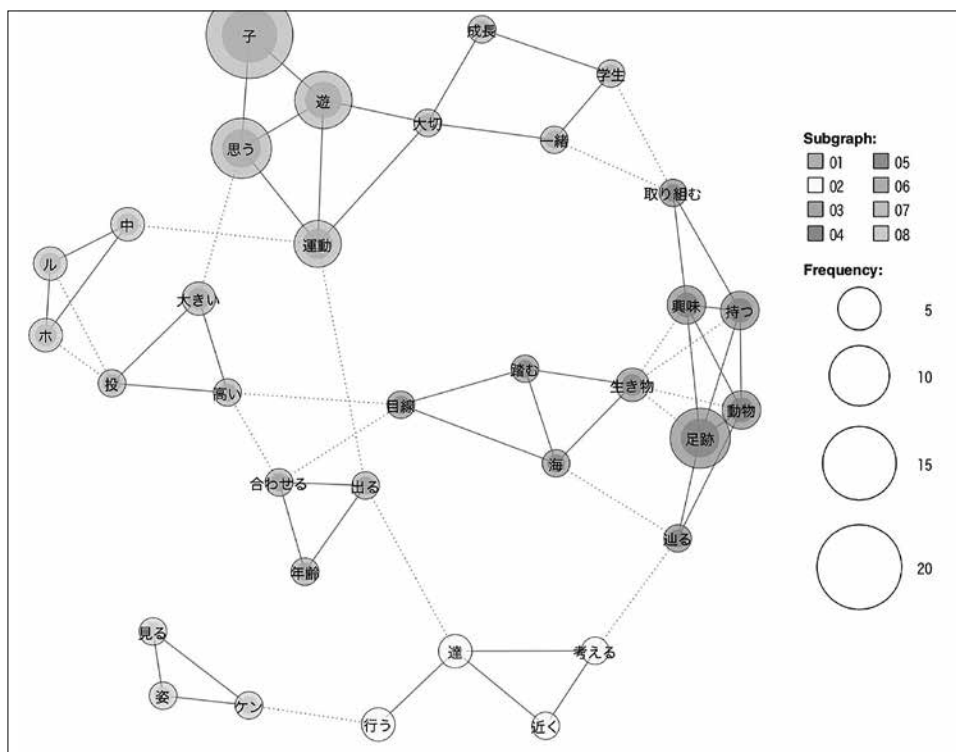


図4 幼稚園教諭の自由記述の共起ネットワーク図

4 考 察

(1) 運動あそびの実践

本研究実践は、「保育内容演習生活と環境Ⅱ」と「保育表現技術体育Ⅰ」の2つの科目の連携授業として実施した。これについて、平成27年度全国保育士養成協議会専門委員会では、「学生の保育者としての成長を保障するには担当教員と非担当教員が保育実習指導や担当科目

の授業内容を効果的な養成教育とするための連携を検討していく必要がある」と報告している¹²⁾。しかしながら、連携授業の実践は様々な障害があり保育士養成校において必ずしも進んでいるとは言えない。

本研究実践における運動あそびのテーマは学生に自由に決定させたが、全てのクラスでボールを使った運動あそびを計画した班があった。特に、段ボールを用いてサッカーゴールを作ってサッカーのPKを準備した班は、男児に人気があった。自分からキーパー役を進んで担当する園児もいて、蹴るだけでなくボールキャッチのあそびにもつながっていた。また、渡り廊下の天井から動物のカードを紐で垂らし、ジャンプしてタッチするあそびも多くの園児が繰り返し遊んでいた。カードの高さが何段階か用意されていたので、少し高いカードに挑戦する楽しさが人気の要因の一つと思われた。更に、イラストの得意な学生が海の生き物を画用紙に描き、そのカードを床に貼り付け片足跳びで進んでいくブースも男女を問わず人気があった。園児は、どんな動物か名前を言いながら進んで行くというルールを面白く感じたのかもしれない。このように、授業担当者からの指示はないにもかかわらず、運動をするだけでなく動物の名前、動物の足あとに興味・関心をもたせることを目標としている班もあった。

(2) アンケートの分析

① 学生対象のアンケート(記述式)

フィンランドのP保育園で実践している運動あそびは、肯定的に捉えた学生がほとんどであった。廊下を走らない場所と教えられてきた学生にとっては、P保育園の運動あそびは目新しい実践と捉え、日本でも導入することで運動の時間を確保できると考えたのかもしれない。また、本実践が実習に役立つと回答した学生がほとんどであった。これは、学生が子ども達に楽しんでもらえる教材を作り、子ども達の反応を直接確認することができたためであろう。

次に、実践に参加した学生と参加しなかった学生で子どもの認識に違いが見られるのかについて χ^2 乗検定を行ったところ、質問5と質問7で統計的な有意差がみられた。まず、質問5の最近の子どもの発育発達の違いは、実践参加者では大きいと回答した学生が統計的に有意に多く、小さいと回答した学生が有意に少なかった。これは、実際に子ども達の運動あそびの様子を観察した結果、事前の予想よりも発育発達の差が大きいと感じた学生が増えたことを意味している。同じ年長組の子どもでも、生まれ月によって発育発達の差が生じるのは当然の現象であるが、学生は子ども達の動きを観察することでよりそのような認識を深めたといえよう。また、質問7の最近の子どもがルールを守って運動あそびができるかについても、質問5と同様に統計的な有意差がみられた。実践参加者ではルールを守れると回答した学生が統計的に有意に多く、ルールを守れないと回答した学生が有意に少なかった。これは、子ども達が運動あそびを行う際に、学生の想定よりもきちんとルールを守って参加できていたことを示唆している。

筆者がその様子を観察した際にも、順番を守って列に並んでいる幼児の姿がどのあそびのブースでも見られた。質問4の最近の子どもの運動能力の違いは、実践参加者と不参加者で有意差が見られなかった。これは、学生が事前に想定していた運動能力の違いの範囲内であったと言えよう。同様に、子ども達があそびを自分達で工夫しているかの質問6でも統計的な有意差が見られなかった。これは、学生が準備した運動あそび自体が、子ども達が工夫してあそびを展開するような設定になっていなかったことがあげられる。いずれにせよ、本調査だけで質問4と質問6において有意差がなかった要因は断定できない。

② 学生対象のアンケート(記述式)

振り返りシートによる学生の自由記述では、半数以上の学生が「子どもの楽しむ姿を見ることができてうれしい」と回答した。これは保育者にとって大切なことの1つである「子どもの目線に合わせて物事を考え、行動する」きっかけになるのではなかろうか。学生は実習でいろいろな教材を考え、指導案を作成する。しかし、実習では前述のとおり指導案作成、実習日誌の記録、教材準備等に時間・労力をさかれるため、本来子どもが持っている「いきいきとした表情」を十分に感じ取る余裕のない学生もいる。一方、今回の取り組みでは指導案の作成などがないため、子どもが真剣に遊ぶ様子をうれしく感じ取る余裕が学生にあったのかもしれない¹³⁾。また、2018年は2017年に比較して、環境構成、教材研究(準備・計画)について言及した学生が多かった。これは、事前準備の時間を2017年より1時間ほど多く費やしていたため、学生が十分な教材研究を行った上で幼稚園での実践を迎えることができ、そのような言及につながったといえよう。

③ 幼稚園教諭対象のアンケート(記述式)

幼稚園教諭対象の自由記述の表7に関しては、次の3点について焦点をあてることにする。まず第1に、本実践の実施場所に関する記述である。当初、学生が日常的に使用している校舎に園児を招待して本実践を実施する予定であった。しかし、園児が移動する時間を短縮するために、学生が幼稚園に移動して普段から園児が利用している保育室の壁面や渡り廊下を利用した。このため、園児は普段から遊んでいる場所で運動あそびを行うことができ、リラックスした状態で遊ぶことができた。これについては、園内で実施できたことを評価する幼稚園教諭のコメントもみられた。ただし、園児が1箇所のブースに集中してしまう場面があったので、園児の動線についても考慮する必要があった。第2に、安全面の配慮に関する記述である。牛乳パックなどを利用して動物の足跡を貼った踏み台をつくったグループの実践では、踏み台自体の強度は十分であったが、床への接着が不十分なため、踏み台がぐらつき園児がバランスを崩す場面があった。すぐに、床への接着を補強するように授業担当者が指示をして、補強の確認

をした。それ以降は、まず授業担当者が安全面の確認をしてから幼児の運動あそびを実践することにした。第3に、運動あそびの効果に関する記述である。恐竜や海の生き物、動物の足跡をデザインした制作物を作った班があり、子ども達はあそびながら動物の名前や足跡の特徴などを覚えることができた。また、ボウリングなどのボールあそび、片足飛びなどは普段あまり行っていないため、良い機会だったとする記述もみられた。

次に、KH Coderによる共起ネットワークを利用した分析を行ったところ、8つのサブグラフ (subgraph) に分類された。まず中段の右側には、「足跡」という言葉の出現度数が大きく、生き物の足跡や動物の足跡に子ども達が興味を示したという記述が多いことがわかった。また、上部には「子」という言葉の出現度が大きく、「子どもと一緒に遊ぶ」、「あそびながら楽しく運動することは学生にとっても嬉しいことだと思う」等の記述がみられた。また、出現頻度が10以上に語句は、「子」、「思う」、「遊ぶ」、「足跡」の4つで、本実践の有効性について記述する幼稚園教諭が多かった。

5 おわりに

本研究実践により次の4つが導かれた。第1に、9割以上の学生が自分たちの実習に本実践が役立つと回答した。第2に、本実践の参加者は不参加者と比較して、子どもの発育発達の差が大きいと回答した学生が統計的に有意に多かった。第3に、本実践の参加者は不参加者と比較して、最近の子どもがあそびのルールを守れると回答した学生が統計的に有意に多かった。第4に、保育室の壁面等を利用した運動あそびの課題として安全性の確保をあげる幼稚園教諭が多かった。ただし、本研究の結果は次の2点で限定されたものであることを付言しておきたい。第1に、本研究の調査対象が特定の幼稚園の園児に限定されている点である。第2に、フィンランドのP保育園における運動あそびは、フィンランドの全ての保育園で実践されている運動あそびではないという点である。今後は、調査対象を拡大して調査を重ね、その結果を基に日常生活に取り入れることが可能な運動あそびの実践を更に検討する必要がある。

参考文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル館, 2017.
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館, 2018.
- 3) 同上書
- 4) 小僧湧司「フィンランドにおける2000年以降の教育改革の現状—特別支援の観点から—」高知大学教育学部研究報告, 第77号, 193-199頁, 2017.
- 5) 柴田卓「運動あそびにおける保育実践力に関する研究—フィンランドの事例と体育系授業の実践—」郡山女子大学紀要, 第53集, 125頁-133頁, 2017.
- 6) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会「幼児期運動指針ガイドブック」, 10頁, 2013.
- 7) 前掲書1)
- 8) 前掲書5)
- 9) 柴田卓 伊藤哲章 猪股照子 ポールエドワードバーナミィ 仲西真美子 三瓶令子「保育者養成校における実習を中心とした科目間連携に関する研究」郡山女子大学紀要, 第54集, 117頁-133頁, 2018.
- 10) 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—」, ナカニシヤ出版, 2014.
- 11) 牛澤賢二「やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦—」, 朝倉書店, 2018.
- 12) 一般社団法人全国保育士養成協議会「専門委員会課題研究報告書」124頁, 2016.
- 13) 前掲書9)